山田詠美

ぼくは勉強ができない

新潮文庫

ぼくは勉強ができない

新潮文庫　や－34－6

平成八年三月一日発行
平成八年四月二十日三刷

著者　山田詠美
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部（〇三）三二六六－五四四〇
読者係（〇三）三二六六－五一一一
振替　〇〇一四〇－五－八〇八
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社　製本・有限会社加藤新栄社
© Eimi Yamada 1993　Printed in Japan

ISBN4-10-103616-0 C0193

この作品は平成五年三月新潮社より刊行された。

新潮文庫

ぼくは勉強ができない

山田詠美著

新潮社版

5648

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目次

ぼくは勉強ができない……7
あなたの高尚な悩み……29
雑音の順位……51
健全な精神……73
○をつけよ……93
時差ぼけ回復……115
賢者の皮むき……135
ぼくは勉強ができる……157
番外編・眠れる分度器……177
あとがき……242
解説　原田宗典

ぼくは勉強ができない

ぼくは勉強ができない

クラス委員長は、ぼくと三票の差で、脇山茂に決まった。彼は、前に出て挨拶をするために立ち上がった瞬間、振り返り、ぼくの顔を誇らしげにちらりと見た。相変わらず仕様のない奴だなあと、ぼくは思う。彼は、ぼくが忌々しくてたまらないのだ。

「えー、皆さんに選出されて、委員長を務めることになった脇山です。まだ慣れないクラスの皆さんが、ぼくを選んでくれたことは、大変光栄で……」

光栄も何も。ぼくは、頬杖をつきながら、ぼんやりと彼の挨拶を聞いていた。皆、彼の名前が、試験の成績発表で常に一位の場所に載っているから、書いただけだ。クラス委員長が誰になろうと知ったことではないのだ。それなのに、彼は、頬を紅潮させて、喋りまくっている。委員長をやると、進学に有利なのだろうか。あれ？　大学受験に内申書なんてあったっけ。

クラス委員長を決める時期になると、ぼくは、小学校五年生の時のホームルームを思い出す。その時も、やはり、投票で委員長を決めることになっていたが、転校して来たばかりで、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

あまり事情の解(わか)っていなかったぼくは、教壇の前の席のおっとりとした様子の女の子の名前を書いた。なんだかやさしそうに見えたからだ。そのことが、まるで重大事件のように扱われるとは予想もしていなかったのだ。

開票が進み、その女の子の名前が呼ばれた時、黒板に向かって、正の字を書いていた生徒は信じられないという様子で後ろを振り返った。クラス全員の子たちが、くすくすと笑い始めた。ぼくは、何がどうなっているのやら、さっぱり解らずに、あたりをきょろきょろ見渡した。その瞬間、担任の教師は立ち上がり、大声で怒鳴った。

「誰だ！　伊藤友子の名前を書いた奴は!?」

皆、くすくす笑うばかりだった。ぼくは、すっかり仰天してしまったのと、腕力の強そうな男の教師に怯(おび)えたのとで、返事をする機会を失ってしまった。

「誰だか手を上げろと言ってるんだ！　ふざけるにも程があるぞ!!」

ふざける？　ぼくは、混乱して、その言葉を頭の中で反芻(はんすう)した。伊藤友子の名を書くことは、ふざけたことなのか？　クラス全員が委員長になり得る、そういうことから、投票で決めることになっていたのではなかったのだろうか。

教師が怒鳴っている間、伊藤友子は、ずっと下を向いたきりだった。肩が震えているように見えた。ぼくは、小声で隣の席に座っている男子生徒に尋ねた。

「ねえ、どうして、伊藤さんの名前を書いちゃ駄目(だめ)なんだい」

彼は、迷惑そうに答えた。
「馬鹿だから」
その瞬間、教師は、ぼくたちに目を止めて、再び怒鳴った。
「そこ!!　何、喋ってる。もっと真面目にならんか！」
隣の生徒は、ぼくに向かって舌打ちをした。ぼくは、肩をすくめていた。教師は腹立たしげに音を立てながら、教室じゅうを歩き回った。
「先生は悲しいよ。皆に行動力をつけさせ、自立心を養うために、クラス委員長を選挙で決めてるというのに。それをふざけた態度で、馬鹿にするとは。投票はやり直しだ。二度目は、自分の名前も横に書くこと。委員長、副委員長、書記、その横に、自分の名前を書いて、記入すること。解ったね」
「解りません」
教師の足が、ぼくの言葉で止まった。ぼくは、小さく呟いただけのつもりだったが、その反対を主張する言葉は予想外に響いてしまったようだった。教師は額に筋を浮き立たせて、振り返った。
「誰だ!!　今、解りませんと言った奴は!!　立て！」
仕様がなくぼくは立ち上がった。クラスじゅうが、ざわめいた。
「時田か。転校して来たばかりで、この学校のことを何ひとつとして解っとらんくせに。で、

どうして、解りませんと答えた？　それを説明してみなさい」
「だって、伊藤さんの名前を書いたのは、ぼくだからです」
一斉に驚きの声が上がった。信じらんなあい。そういう叫びにも似た声が、ぼくの耳に突き刺さった。
「……おまえだったのか。しかし、何故だ。転校して来たばかりとはいえ、誰を選んで良いのか、おまえにも区別はつくだろう。それとも、茶化してみたかったのか」
「そうではありません」
「じゃ、まだ友達が出来なくて、事情が飲み込めてなかったんだな」
「そういうんでもないです」
「じゃ、何なんだ」
「伊藤さんが、クラス委員長でも良いと思ったからです」
「なにい!?」
再び、笑いの渦が起こった。
「きさま、このクラスをなめているのか」
「なめてません。先生、どうして、伊藤さんでは駄目なんですか？」
教師は、言葉に詰まって唇を歪めた。
「……じゃ、おまえは、何故、伊藤が相応しいと思ったんだ」

「親切そうだからです」
誰もが笑い転げた。中には、机を叩いているものもいた。ぼくは、憮然としたまま、教師をにらみつけていた。訳の解らない怒りが、ぼくの心に急速に湧いて来たのだった。
「まあ、いい。時田は、転校生で何も解らんのだ。皆、投票をやり直す必要はない。どうせ一票ぐらい無効があったって、結果には変わりないのだ。丸山、残りのやつを開票しなさい。時田は座ってよろしい。今後、注意するように」
そうは行かなかった。ぼくは、伊達に、十一年間生きて来たのではないのだ。ここで引き下がるのは恥だ。ぼくの母は、いつも、格好の良い男になるのよ、と、ぼくを諭してくれたのだ。
「先生は、ぼくの質問に答えていません」
「何？」
「どうして伊藤さんでは駄目なのですか」
「……」
「勉強が出来ないからですか？」
教師は答えなかった。ぼくを完全に無視したまま、丸山という前回の委員長に、残りの票を読み上げるよう促した。伊藤友子の名は、もう呼ばれることはなかった。ぼくは、仕方なく腰を降ろしたが、気持は暗かった。前に目をやると、机に伏せて鼻を啜っている伊藤友子

の姿が見えた。ぼくは、この時、初めて、大人を見くだすことを覚えた。

「それでは、副委員長は女子から、黒川さん、書記は、二番目に票の多かった男子と女子から一名ずつ、時田くんと、沢田さんになります」

ぼくは、我に返って黒板を見た。その前で、利発そうな女生徒が挨拶をしていた。額が綺麗だなあとぼくは思った。まだ処女かなあ。十七歳。ぼくは、とうに、女と寝る経験をすませている。黒川礼子という女生徒のうなじや唇に心を奪われていると、いつのまにか、ぼくの名が呼ばれた。くすくすと笑い声が洩れる。いつも、そうなのだ。ぼくが、何か行動を起こす段になると、女の子たちの好意的な笑いが周囲に巻き起こる。そして、ぼくは、それが大好きだ。

「時田秀美です。最初に言っとくけど、ぼくは勉強が出来ない」

生徒たちは笑い転げた。ぼくは、どうしてうけちゃうのかなあと呟いて頭を掻いた。

「おまけに字も下手だ」

益々、皆、笑い続けた。

「それなのに、どうして、ぼく、書記なんかになっちゃうの」

誰もやりたくないからよ、という声が飛んだ。ぼくは、その声の方を指差して言った。

「違う。ぼくが人気者だからだ」

担任の桜井先生が笑いながら、ぼくに言った。

「おい、時田、冗談は、そのくらいにしておけ。おまえが、勉強出来ない人気者だってのは、皆、もう知ってる」

ぼくは、先生を見て肩をすくめた。誰もが笑っていた。もちろん、めでたく委員長になった脇山をのぞいては。彼は、ぼくの言葉を耳に入れるのも嫌だというように不愉快な顔で下を向いていた。

「桜井先生がそうおっしゃるので、ぼくは席に着きます」

ぼくは、そう締めくくり、一番後ろの自分の席まで歩いた。途中、脇山が、ぼくに小声で囁いた。

「勉強出来ないのを逆手に取るなよな」

ぼくは、彼を無視して席に着いた。開けられた窓から春の風が吹き込み、ぼくは心地良さに目を細める。ぼくは日曜日に、祖父と釣りに行くべきか、母の買い物につき合うか、恋人の桃子さんとセックスをすべきかの楽しい選択に心を悩ませながら放課後を待ちわびた。そこに父との予定は、もちろんない。ぼくは、父親の顔すら知らないのだ。

授業が終わり、ぼくがサッカー部の部室で着替えていると、桜井先生がドアを開けた。彼は、サッカー部の顧問をしているのだ。

「先生、ドア開ける時はノックしてくださいよ。マネージャーの女の子かと思ってあせっちゃったよ」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com